琉球大学学術リポジトリ

新聞記事にみる大正期沖縄県における移民事象

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja): 新聞記事, 沖縄県, 海外移民, 大正期, 移民事象
	キーワード (En):
	作成者: 石川, 友紀, Ishikawa, Tomonori
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010112

移民研究 第8号　2012　57-79

新聞記事にみる大正期沖縄県における移民事象

石川友紀

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．大正期沖縄県の新聞記事収集の研究史
Ⅲ．大正期沖縄県移民の新聞記事収集と見出しの分析
Ⅳ．収集新聞記事の事例
Ⅴ．おわりに

キーワード：新聞記事，沖縄県，海外移民，大正期，移民事象

Ⅰ．はじめに

沖縄県において最初に発行された新聞は1893年（明治26）9月那覇で創刊された『琉球新報』といわれる。同新聞は現在まで継続発行されているので，その1紙だけでも今年で119周年を迎えることになる。その後，県内でも10紙以上の新聞が発行されているが，明治期だけでも『琉球新報』についで，12年後の1905年（明治38）11月に『沖縄新聞』，1908年（明治41）12月に『沖縄毎日新聞』と主要な3紙が創刊された。大正期には1915年（大正4）11月に『沖縄朝日新聞』，1919年（大正8）に『沖縄時事新報』『沖縄日日新聞』，1920年（大正9）11月に『沖縄タイムス』，昭和期には1931年（昭和6）11月に『沖縄日報』，1940年（昭和15）12月に『沖縄新報』などが創刊された。このほかにも，短期間発刊された新聞はあったようだし，また，1899年（明治32）1月に沖縄倶楽部の機関誌としての『沖縄時論』も発行された。なお，第二次世界大戦後の県内の新聞については，断続した期間をへて上記の新聞名と同一のものもあり，今回はふれないことにする。

本稿では2012年『南島文化』第34号に執筆した「新聞記事にみる明治期沖縄県における移民事象」[1]に引きつづき，大正期の県内の移民事象を取り上げる。沖縄県の新聞記事の移民事象を対象とする時期としては，明治期は県内の移民開始の1899年（明治32）から1912年（明治45・大正1）までの14年間とした。大正期は1913年（大正2）から1926年（大正15・昭和1）までの14年間とし，移民の新聞記事の収集と事例もこの期間とした。

Ⅱ．大正期沖縄県の新聞記事収集の研究史

明治期を含めて，これまで県内の新聞記事の収集は「新聞集成」等の形で県や市町村の『沖縄県史』や『那覇市史』など数多く発刊されてきた[2]。本章では前論文の研究史では取り

上げなかった沖縄県の新聞記事収集の事例を紹介する。

①沖縄県教育委員会（1999）『沖縄毎日新聞見出集（上）—1909 年（明治 42）2 月～1910 年（明治 43）12 月 —』沖縄県史研究叢書 5.
②沖縄県教育委員会（1999）『沖縄毎日新聞見出集（中）—1911 年（明治 44）1 月～1912 年（大正元）12 月 —』沖縄県史研究叢書 6.
③沖縄県教育委員会（2000）『沖縄毎日新聞見出集（下）—1913 年（大正 2）1 月～1914 年（大正 3）12 月 —』沖縄県史研究叢書 8.

大正期の沖縄県の新聞は『沖縄県史』のもとになった琉球政府発行の資料編としての第 16 巻の「政治経済 1」（1967 年発行）, 第 17 巻の「政治経済 2」（1968 年）, 第 18 巻の「教育」（1966 年），第 19 巻の「社会文化」（1969 年）分野の主要な関係記事が,『琉球新報』の大正 1 年 1 月から大正 7 年 5 月まで,『沖縄毎日新聞』の大正 1 年 1 月から大正 3 年 12 月まで，国立国会図書館保存分から収録されている。これをみると，沖縄県の大正期の新聞は 1918 年（大正 7）6 月以降, 1926 年（大正 15・昭和 1）12 月までの 8 年 6 か月分の新聞が『沖縄県史』の「新聞集成」には収録されていず，未発見ということになる。

ここで，最近の第二次世界大戦前の県内の新聞収集に関する発見や保存状況の研究成果をみることにする。

2003 年当山昌直・下地智子は「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノート」『史料編集室紀要』第 28 号で，つぎのように戦前の県内発行の新聞の収集状況について解説している。

> 戦前の新聞は，近代史料が戦火によって焼失した沖縄では極めて貴重な史料として位置づけられる。しかしながら，沖縄島で発刊された新聞も戦火で失われてしまい，その一部が県外で保管されていたのが残っているだけにすぎない。特に，国立国会図書館には一部の欠号があるものの，明治 31 年 4 月 1 日から大正 7 年 5 月 31 日までの新聞がまとまって保管されており，貴重な史料となっている。これらの県内外に残っている沖縄の戦前の新聞については, これまで沖縄県立図書館が『沖縄関係新聞展展示目録』（1985 年）に沖縄の戦前の新聞について整理してまとめられている。さらに, 下地（1997）は，明治から大正期の新聞について調査し，新聞の各号数ごとに原紙の所蔵者，保存状態まで詳しく調べて，一覧表にまとめている。その後，当山（1999）は，東京大学明治新聞雑誌文庫において新たに収集された戦前の沖縄の新聞を報告している。また，さらに新たな新聞も収集されており，戦前の沖縄島で発行された新聞について再度整理をする必要が出てきた（85 頁）。

その後の記述をみると，現存が確認されている明治期と大正期の沖縄本島内で発行された新聞として，『琉球新報』『沖縄新聞』『沖縄毎日新聞』『沖縄日日新聞』（一部『沖縄毎日新報』）『沖縄朝日新聞』『沖縄時事新報』『沖縄タイムス』『沖縄民報』『沖縄日の出新聞』『沖縄毎夕新聞』の 10 紙が，発刊年月日・新聞紙名・号数・現存頁・原紙所蔵者・備考の順に，データベース化して 8 つの表（略）にまとめられている。

2008 年に当山昌直は「近代沖縄の新聞収集に関する調査メモ」『史料編集室紀要』第 33 号で，以下のように戦前の沖縄県の新聞調査と収集の成果を発表している。

> 筆者は，1997 年から近代沖縄の新聞調査と収集を行ってきた。これらの収集の成果をまとめたのが，2007 年に沖縄県教育委員会より発行された『沖縄県史研究叢書 17 植物標本より得られた近代沖縄の新聞』である。題名が示すとおり植物標本から得られた近代沖縄の新聞が 327 枚（654 面）に大阪毎日新聞鹿児島沖縄版が 2 面加えられて，合計 656 面（656 頁）が掲載されている。その内（327 枚）の 323 枚（破損した 4 枚を除く）が全紙大として未発見の新聞であった。本稿は，これらの新聞調査および収集の経緯等について概要を整理したものである（11 頁）。

当山は調査の動機についで，大学における調査として 1997 年 11 月・1998 年 5 月・2002 年 10 月・2003 年 2 月・2007 年 3 月の計 5 回京都大学で，1998 年 2 月東京大学で沖縄県関係戦前の新聞の調査を行った。また，2005 年 2 月と 12 月に和歌山市において坂口總一郎氏自宅より，植物標本を包んでいた戦前の県の新聞紙段ボール 79 箱分を，沖縄県公文書館内の史料編集室へ引き取り，坂口總一郎資料として保存することにした，という。

その「まとめ」として，当山は以下のように新聞収集の調査成果と今後の展望を記している。

> 当時の新聞は，基本的に 1 面から 4 面までであり，植物標本を挟むために利用する場合は，新聞を半分に切って 2 枚とし，1 枚は 1 面と 2 面が裏表，2 枚目は 3 面と 4 面が裏表になるようになっていた。中には，1 面から 4 面まで切られず使用されているのもあるが，すべて切ったものとして計算すると，京都大学から 71 枚，坂口氏から 288 枚で合計 359 枚になる。これらのすべてを表 1 から表 12（略）に示した。359 枚の内，重複しているのは 8 枚であり，重複を差し引くと 351 枚になる。次に 351 枚から，原紙が国立国会図書館等を含めた他の機関にも保管されている新聞の 24 枚を差し引き，また破損が著しい等で全紙大とはいえない 4 枚を差し引くと，全紙大として未発見の新聞は 323 枚になった。なお，京都大学の調査はまだ始まったばかりであり，また坂口氏の資料はまだ完全には整理されていないので，今後新たに未発見の近代沖縄の新聞が見つかる可能性がある（16 頁）。

上記の表 1 ～表 12 についてみると，1906 年（明治 39）9 月から 1937 年（昭和 12）7 月までの『沖縄朝日新聞』『沖縄時事新報』『沖縄昭和新聞』『沖縄新聞』『沖縄タイムス』『沖縄日日新聞』『沖縄日報』『琉球新報』『沖縄毎日新聞』『日刊沖縄新聞』（夕刊）『八重山新報』『大阪毎日新聞鹿児島沖縄版』の 12 紙からの入手新聞を，西暦（年号）月日・号数・頁・元（号）の順にデータベース化している。

2008 年納富香織は「新たな沖縄近代史像を描き出す資料集 ―『植物標本より得られた近代沖縄の新聞』―」『史料編集室紀要』第 33 号で，大正期の沖縄県の新聞の保存状況と，新発見の新聞資料について，次のように解説している。

> 全紙大の新聞がほとんど残っていない大正中期から昭和前期の社会状況を知るには，「比嘉春潮新聞切抜綴」「東恩納寛惇新聞切抜帳」「天野鉄夫新聞切抜帳」（いずれも沖縄県立図書館蔵）や，「宮城真治収集戦前新聞資料」（名護博物館蔵），『清川安彦氏　新聞切り抜き』（那覇市歴史博物館蔵）等，個人の新聞切抜集も貴重な手がかりとなる。
>
> このような状況をふまえ，史料編集室では新沖縄県史編集事業の一環として新聞資料についても多方面から情報を収集し調査を行ってきた。その成果を『沖縄県史研究叢書 17　植物標本より得られた近代沖縄の新聞』（沖縄県教育委員会，2007 年 3 月）として刊行した。
>
> これまでの調査で収集し，本書に掲載した新聞資料（原紙）は，近代の沖縄県で発刊された新聞 12 紙が 327 枚，及び県外で発刊された沖縄関係新聞『大阪毎日新聞　鹿児島沖縄版』1 枚である。そのうち『沖縄朝日新聞』『沖縄時事新報』等，これまで所蔵が確認できなかった時期の新聞，新発見の『沖縄日日新聞』（昭和 6 年創刊），個人所有の新聞切抜等で確認されていたが全紙大の原紙は新発見となる『沖縄昭和新聞』（昭和 3 年『沖縄タイムス』より改題），『日刊沖縄新聞』（昭和 9 年創刊）も収録している。
>
> 本書はまさに沖縄近代史の解明に不可欠な基礎資料である。以下，これまでの新聞の入手経緯・収録内容・本書の広報活動を記し，そして新たな沖縄近代史像の一端を描き出してみたい。そのことにより本書が沖縄近代史の解明に不可欠な基礎資料集であるということを提示し，広く県民の皆様にご活用いただければと思う（21 - 22 頁）。

Ⅲ．大正期沖縄県移民の新聞記事収集と見出しの分析

沖縄県において大正期の新聞はさほど多くみつかっていない。それでも前項でみてきたように，最近県公文書館内の沖縄県教育委員会発行の『史料編集室紀要』等で，2000 年以降に発見された戦前の新聞のなかに，大正期の貴重な移民記事が含まれている事例が少なくないことが確認された。

本章では最初に，『沖縄県史』資料編「新聞集成」の「社会文化」「政治経済」「教育」

分野の順に移民の新聞記事を取り上げてみよう。

表 1 は 1969 年琉球政府発行の『沖縄県史』第 19 巻資料編 9・新聞集成（社会文化）の大正期の移民関係記事見出し一覧である。記事掲載年月日をみると，1913 年（大正 2）4 月 17 日から 1918 年（大正 7）5 月 27 日までの 5 年間余である。この間,『琉球新報』『沖縄毎日新聞』の 2 紙より , 48 件の県移民記事が収録されている。最も多い記事は 1914 年（大正 3）の 21 件であった。

記事見出しをみると，明治期は圧倒的にハワイ移民関係が多かったが，大正期になるとハワイ（布哇）もみられるが，ブラジル（伯国），フィリピン（比律賓），南洋群島（南洋）の移民関係記事が増加してくる。

一方，沖縄県内の移民事象が数多く取り上げられ，その記事もバライティーに富む。戦前の移民は出稼ぎが目的であったので，そのほとんどの者が郷里へ送金した。大正期も明治期と同様，県や郡単位にまとめられた送金の記事が多い。いまひとつは，善良な移民をだました，通称「移民食い」が問題となっている記事も目立つ。また，ハワイ入国の際の「見せ金」問題や事件，移民の奨励や教育，渡航時の注意の記事などもみられる。

1968 年発行の『沖縄県史』第 17 巻資料編 7・新聞集成（政治経済 2）より，大正期の県関係移民記事を拾いだしてみると，以下の 3 件がみつかった。もっとも同書は県の政治や経済の分野についての記事が収録されているので，直接移民の記事はでてこない。それでも見出しにはなくとも，内容に移民事象が含まれている事例が多多ある。

①「昨年の那覇港，輸出入貨物に就て（上），和宇慶香陽」『沖縄毎日新聞』大正 2 年 2 月 12 日（『沖縄県史』第 17 巻 393 - 394 頁）

②「高橋知事の演説（二）, 1 月 15 日政友会本部の茶話会席上に於いて」『沖縄毎日新聞』大正 3 年 1 月 28 日（472 - 473 頁）

③「知事演説要項, 歓迎席上に於ける」（鈴木県知事）」『琉球新報』大正 5 年 6 月 18 日（749 - 750 頁）

1966 年発行の『沖縄県史』第 18 巻資料編 8・新聞集成（教育）より，大正期の県関係移民記事を拾いだしてみると，以下の 18 件がみつかった。本書でも県の教育の分野のなかに移民記事が含まれているので，内容をみての検索によるものである。

①「一中卒業生の志望」『沖縄毎日新聞』大正 2 年 3 月 23 日（『沖縄県史』第 18 巻 647 頁）

②「県農卒業生現状（上）」『琉球新報』大正 5 年 12 月 10 日（897 - 898 頁）

③「県農卒業生現状（中）」『琉球新報』大正 5 年 12 月 11 日（899 頁）

④「県農卒業生現状（下）」『琉球新報』大正 5 年 12 月 12 日（899 - 900 頁）

表１　『沖縄県史』第 19 巻資料編 9・新聞集成（社会文化）の大正期の移民関係記事見出し一覧（1969 年）

	記事掲載年月日		新 聞 名	記事見出し	記事掲載頁	備　　考
1	1913（大正2）	4.17	『琉球新報』	呈日比県知事，実業之布哇社長 当山哲夫	585-586	
2	〃	4.21	〃	移民訴訟問題（投移民父兄）	586-587	
3	〃	4.23	『沖縄毎日新聞』	本県移民の冷遇	587	
4	〃	6.8	〃	全国昨年度の海外移民	588-589	明治45年1月～大正元年12月
5	〃	8.3	『琉球新報』	布哇在留県人の実情，一県人	592	
6	〃	8.21	〃	本県移民送金額	592-593	明治44年1ヶ年中の送金額
7	〃	8.21	〃	金口木舌（移民の送金）	593	
8	〃	10.11	〃	伯国移民応募禁止事情	594	
9	〃	11.23	〃	移民父兄集会	603	
10	1914（大正3）	1.28	〃	金口木舌（移民奨励）	609-610	
11	〃	3.21	〃	本県移民送金額	610-611	大正元年度の海外移民数と送金額
12	〃	3.24	〃	布哇移民見せ金問題，又々移民の郷里荒さる	611-613	
13	〃	3.27	〃	金口木舌（見せ金問題）	613-614	
14	〃	4.17	〃	移民事件示談勧告，見へ透いた魂胆	614-615	
15	〃	4.21	〃	布哇見せ金事件	615	
16	〃	4.29	〃	移民父兄の一人より，関係者の結束を促す	616	
17	〃	5.6	〃	移民見せ金事件	617	
18	〃	5.9	〃	公開状（移民父兄へ），移民父兄殿，傍聴生殿	617-618	
19	〃	5.10	〃	公開状（傍聴生より）	619	
20	〃	5.12	〃	移民父兄大会	619	
21	〃	6.13	〃	移民送金高	623	大正3年4月中の送金額
22	〃	6.17	〃	見せ金事件終決，欠席裁判言渡し	623	
23	〃	9.11	〃	移民喰ひ来る，瞞されてはならぬ	627-628	
24	〃	9.18	〃	漁民の出稼失敗，五十余名移民屋の網に罹る	628	

25	1914（大正3）	11.5	〃	福亀の毒手段	632	
26	〃	11.6	〃	移民事件中止，渡辺警部の一喝，福亀大に畏入る	632-634	
27	〃	11.9	『沖縄毎日新聞』	移民喰ひ福亀，又々やり出さんとす	634-635	
28	〃	11.10	〃	移民喰ひ福亀（続），又々やり出さんとす	635	
29	〃	11.19	『琉球新報』	渡久地氏の演説，移民に関する質問	636-637	
30	〃	12.15	〃	移民送金額	645-646	大正2年中送金額
31	1915（大正4）	1.27	〃	県外発展	649-650	
32	〃	3.19	〃	首里署管内移民	660-661	
33	〃	6.18	〃	人口問題	663-664	
34	〃	6.30	〃	貪欲の手続人，余りの悪辣手段に，激昂せる布哇移民	665-666	
35	1916（大正5）	4.8	〃	徴兵忌避者告発数	691	明治31年～大正4年
36	〃	7.22	〃	入墨女，比律賓から送還さる，将来の本県移民の為	696	
37	〃	7.23	〃	風俗改善の必要	697	
38	〃	7.29	〃	偽名帰国して処罰せらる，徴兵検査を免かれん為	697-698	
39	〃	11.12	〃	海外移民の送金高	699	大正4年中送金額
40	〃	11.26	〃	南洋と本県移民，自由移民歓迎	700	
41	1917（大正6）	2.9	〃	本県と伯国移民，第一期移民二百余名	705	
42	〃	2.10	〃	移民教育の必要	705-706	
43	〃	7.14	〃	中頭郡の移民，五年中の送金高	708	
44	〃	7.28	〃	内外人嘆賞す，伯国の本県移民	708	
45	〃	12.20	〃	国頭郡移民数	715	大正5年4月現在調査
46	1918（大正7）	2.5	〃	本県移民七名惨殺さる，比律賓兵の蛮行，前代未聞の事件	719	
47	〃	3.6	〃	沖縄移民恐慌，南洋渡航者注意	722-723	
48	〃	5.27	〃	国頭郡移民送金	726	大正2年～同6年までの送金額

（石川友紀作成）

⑤「農学校卒業生現況」『琉球新報』大正 6 年 10 月 28 日（943 頁）
⑥「在外県農卒業生」『琉球新報』大正 6 年 11 月 21 日（947 頁）
⑦「県農卒業生現況（一），学校当事者談」『琉球新報』大正 7 年 2 月 4 日（967-968 頁）
⑧「県農卒業生現況（二）」『琉球新報』大正 7 年 2 月 5 日（969 頁）
⑨「県農卒業生現況（三）　学校当事者談」『琉球新報』大正 7 年 2 月 6 日（969-970 頁）
⑩「県農卒業生現況（四），学校当事者談」『琉球新報』大正 7 年 2 月 7 日（970-971 頁）
⑪「県農卒業生現況（五），学校当事者談」『琉球新報』大正 7 年 2 月 8 日（971-972 頁）
⑫「県農卒業生と移民」『琉球新報』大正 7 年 2 月 18 日（974 頁）
⑬「学校から社会へ（一），卒業生の売口，（那覇）商業学校」『琉球新報』大正 7 年 2 月 22 日（978 - 979 頁）
⑭「学校から社会へ（二），卒業生の売口，男子師範学校，教員不足で引っ張り凧」『琉球新報』大正 7 年 2 月 23 日（979 - 980 頁）
⑮「学校から社会へ（七），卒業生の売口，（県立）水産学校，海外渡航熱が嵩り大谷光瑞師の下に行くのもある」『琉球新報』大正 7 年 3 月 2 日（983 - 984 頁）
⑯「学校から社会へ（九），卒業生の売口，県立農学校，海外熱で供給不足」『琉球新報』大正 7 年 3 月 5 日（985 頁）
⑰「本県に家政女学校，設立の計画，島袋源次郎氏の抱負」『琉球新報』大正 7 年 3 月 16 日（988 頁）
⑱「愈々廃校した島尻女子徒弟学校，工業研究所に変る」『琉球新報』大正 7 年 3 月 23 日（989 - 990 頁）

表 2 は 2007 年沖縄県教育委員会発行の『植物標本より得られた近代沖縄の新聞』の大正期の移民関係記事見出し一覧である。この記事掲載年月日をみると，大正期後半の 1920 年（大正 9）2 月 7 日から 1925 年（大正 14）6 月 29 日までの 5 か年余にわたる 29 件の新聞記事収集の見出しである。同書の凡例をみると，以下のようになっている。

1. 本書は，坂口總一郎資料，京都大学総合博物館，京都大学植物学教室の植物標本より得られた近代沖縄の新聞のリストと新聞の画像よりなる（一部県外で発行された沖縄関係の新聞を含む）。
2. 画像の掲載順は，沖縄朝日新聞，沖縄時事新報，沖縄昭和新聞，沖縄新聞，沖縄タイムス，沖縄日日新聞，沖縄日報，日刊沖縄新聞，琉球新報，大阪毎日新聞鹿児島沖縄版とした。
3. 本書の編集は当山昌直，納富香織が担当した。

表 2 の新聞名をみると,『沖縄朝日新聞』『沖縄時事新報』『琉球新報』『沖縄日日新聞』『沖縄タイムス』の 5 紙がみられる。このうち『沖縄時事新報』を除き，他の 4 紙が大正後期県内で継続して発行していたことがうかがえる。

記事見出しを分析すると，移民記事が 29 件採録されているが，広告が 14 件と全体の 48.3% をも占める。広告の内容はそのほとんどが移民周旋業者による海外移民の募集に関する記事である。その移民先国（地域）はハワイ，北米・南米，サイパンなどの南洋群島，東南アジアのフィリピンなどである。

明治期と同様，海外移民からの送金や持戻金および県経済に及ぼす送金などの記事もみられる。人物としては，徳田安栗・小橋川朝光・小那覇三郎・徳田安敦・亀井捨之助・大田朝敷に関する記事がでてくる。また，移民宿としては鹿児島市や横浜市の旅館もよく利用されていたようである。

Ⅳ．収集新聞記事の事例

本章で取り上げる沖縄県移民関係の収集新聞記事の事例は，1913 年（大正 2）4 月から 1918 年（大正 7）3 月までの大正期前半に相当する約 5 年間分の 14 件である。表 2 の見出し一覧で取り上げた 1920 年（大正 9）以後の大正期後半の新発見の移民記事については，本稿では枚数の関係もあり除くことにした。なお，句読点は引用者により付した。

①「本県移民の冷遇」『沖縄毎日新聞』大正 2 年 4 月 23 日（『沖縄県史』第 19 巻, 587 頁）

近頃海外渡航者に対して十二指腸虫の検査厳格となり，我政府に於ては多額の費用をかけて検査担任官吏を置き，充分なる検査を行ひ，合格者に限り渡航を許可し，直接乗船渡航せしむ。然るに，本県よりの渡航者に限り，当地に於て予備検査を受けたる上，更に乗船地に於て再検査を行ひ，然る後合格するものに限り，乗船渡航を許可することに成れる由なるが，斯の如きは本県海外渡航者の為め，此上なき不便不利益にして，本県民を継子扱ひするものと云ふべし。茲に賢明なる当局に乞ふ。本県海外渡航者の為め，当地に於てのみ検査を受ける様，尽力せられんことを切望して止まざるなり，云々。某関係者は語れり。

1913 年（大正 2）といえば大正期に入ったばかりで，沖縄県にとっては明治後期から引きつづき，ハワイなどへの移民の盛んなころであった。この記事は海外渡航者に対する十二指腸虫の検査が，日本本土の場合 1 回ですむのを，県の場合予備検査を受けているにもかかわらず，乗船地で再検査を行い二重になり，不便不利益をこうむっている，という。そのことに対する陳情である。

表２『植物標本より得られた近代沖縄の新聞』の大正期の移民関係記事見出し一覧（2007 年）

	記事掲載年月日		新 聞 名	記事見出し	記事掲載頁	元所在（原典参照）	備　考
1	1920（大正9）	2.7	『沖縄朝日新聞』	（広告）桟橋ヨリ一丁位ステイション迄三丁位　浪屋旅館	2	1497・1	鹿児島市生産町海岸通り
2	〃	2.19	『沖縄時事新報』	（広告）各国渡航の移民…，日本郵船会社等特約店，旅館津久井屋，館主水島高正	228	247・3	横浜市本町6丁目
3	〃	7.6	〃	（広告）同上	234	382・1	〃
4	〃	10.8	『琉球新報』	不逞鮮人の所為と誤解された火薬密売事件 南洋に密漁の目的で，火薬を輸出せんと企て横須賀で逮捕された一味の公判	558	7264・3	
5	〃	12.31	〃	（広告）南洋サイパン行デ，南洋殖産株式会社代理，徳田安栗	565	7344・4	
6	1921（大正10）	2.2	『沖縄日日新聞』	花嫁がドシドシ殖える，荒み行く南洋の労働者に，領事館で妻帯の宣伝	428	4063・3	
7	〃	2.8	〃	（広告）移民周旋業開始，エスオー海外渡航事務所，小橋川朝光，小那覇三郎	430	4069・1	那覇区新町3丁目
8	〃	6.2	『沖縄タイムス』	（広告）移民周旋業開始，エスオー海外渡航事務所，小橋川朝光，小橋川三郎	310	200・1	那覇西新町3丁目
9	〃	6.11	〃	（広告）同上	312	209・1	〃
10	〃	6.13	〃	（広告）同上	314	211・1	〃
11	〃	12.23	『琉球新報』	研究録，南洋委任統治地（4）越来校　安座間生	573	7672・2	
12	1922（大正11）	2.9	『沖縄タイムス』	（広告）移民周旋業開始，エスオー海外渡航事務所主任 小那覇三郎	327	427・4	那覇市西新町3丁目
13	〃	7.27	『沖縄朝日新聞』	（広告）布哇渡航者ノ父兄ニ謹告，海外移民周旋業，徳田事務所	46	2295・3	那覇市前ノ毛
14	1923（大正12）	9.19	『琉球新報』	布哇出稼の首途から，遭難帰県の途へ	610	8213・3	

15	1923（大正12）	10.11	『沖縄タイムス』	（広告）南洋サイパン行，南洋興発会社募集所　亀井捨之助，南洋ヒリツピン行募集シマス，海外興業株式会社業務代理人，亀井捨之助	361	954・4	那覇市通堂
16	〃	10.31	〃	農林卒業生695名に及ぶ，海外発展者も多い	363	973・4	
17	1924（大正13）	12.24	『沖縄朝日新聞』	（広告）南洋サイパン行募集，南洋興発会社募集事務所，亀井捨之助	96	3100・1	那覇市通堂
18	1925（大正14）	2.22	『琉球新報』	港川漁民の南洋雄飛，刳舟2隻で	612	8708・3	
19	〃	3.4	『沖縄朝日新聞』	農村の疲弊を息付かす，県外出稼の送金高，昨年中に於ける国頭郡の送金総額116万円余	118	3166・3	
20	〃	3.5	『沖縄タイムス』	通信文化展へ，南洋から出品，主催者は珍品と喜ぶ	384	1436・3	
21	〃	3.6	『琉球新報』	（広告）ヒリツピン行募集 海外興業株しき会社，業務代理人 亀井捨之助	616	8720・5	那覇市西本町5丁目
22	〃	3.6	『琉球新報』	南米北米行 呼寄移民募集，海外渡航申込所，富士瓦ス紡績会社出張所，徳田安敦・徳田安栗	617	8720・6	那覇市上倉町1丁目
23	〃	3.17	『沖縄朝日新聞』	出稼旅費の利子にも足りない，彼等の送金高 1人平均月1円80銭	142	3179・3	
24	〃	5.1	〃	県下郵便局を通じて，流入する為替金　1年500余万円	146	3222・3	
25	〃	5.2	〃	大絃小絃（本県出稼人の送金）	149	3223・2	
26	〃	5.5	〃	（広告）呼出移民，南米ペルー国・アルゼンチン国・ブラジル国・メキシコ国行，北米布哇，米国，カナダ行，徳田事務所	152	3226・1	那覇市上ノ倉町1丁目
27	〃	5.19	〃	（広告）同上	154	3238・1	〃
28	〃	6.29	〃	今般渡米ニ際シテハ結構ナル御餞別を辱フシ，且出発ニ當リテハ…，大田朝敷	178	3279・1	
29	〃	6.29	〃	万歳の歓呼裡に，大田朝敷氏　きのふ出発	179	3279・2	

（石川友紀作成）

②「本県移民送金額」『琉球新報』大正 2 年 8 月 21 日（同上巻，以下省略 592 - 593 頁）

海外諸国に於る本県移民の一昨明治四十四年一ヶ年中の送金額は，給高七十七万八千二百六十八円余にして，其在留人員と送金高とを国別にすれば左（下）の如し。

国　別	在留人員　（人）	送金額　（円）
北米	二四七	八二, 八九二
布哇	七, 一四五	四七四, 六三三
墨西哥	一二二	一一, 六六一
秘露	四二五	一一, 八〇三
ニューカレドニア	四九一	一四, 〇六九
大洋島	八一	一一, 一七六
加奈陀	一一四	二二, 〇二七
比律賓	一三六	四, 二八三
オーストラリア	不明	三, 三二五
亜爾然丁	一一	一四, 七三二
伯剌西爾	三〇六	一二八, 四〇四
英国	不明	三八八
送金国土不明		二七, 六五三
計	九, 二六七	七〇七, 〇五一

尚ほ，帰朝者に依托して送金せる者三百八十五人にして，送金額は七万一千二百十七円なり。

表をみると, 1911 年（明治 44）1 か年中の沖縄県への海外移民の送金額は 70 万 7,051 円で，在留人員は 9,267 人である。また，帰朝者に依托して送金せる者は 385 人で，その送金額は 7 万 1,217 円である。移民先国（地域）別送金額をみると，首位はハワイ（布哇）の 47 万 4,633 円であり，これは全体の 67.1% をも占める。2 位はブラジル（伯剌西爾）の 12 万 8,404 円で全体の 18.2%，3 位はアメリカ合衆国本土（北米）の 8 万 2,892 円で 11.7% を占め, 4 位はカナダ（加奈陀）の 2 万 2,027 円, 5 位はアルゼンチン（亜爾然丁）の 1 万 4,732 円，6 位はニューカレドニア島の 1 万 4,069 円であった。また，帰朝者に依托した送金額が 7 万 1,217 円もあった。

③「伯国移民応募禁止事情」『琉球新報』大正 2 年 10 月 11 日（594 頁）

南米伯国に於ける本県移民が，諸処の耕地より逃亡したる者多数あるに依り，外務省は這般本県よりの同国行移民渡航を禁止したり，本県人が移民として伯国へ渡航し初たるは，去る明治四十一年以後にして，竹村与左エ門及東洋移民合資会社取扱

ひに依りて，今日迄渡航せる者二百余名に達し，中には着々功を収めつゝある者もあり。且つ，海外出稼地として同国の如きは屈指の有望地なるに，突如応募権を剥奪せらるゝは，県民の海外発展の一路を閉塞されたる事となりし訳にて，遺憾の至りなるより，其筋に於ては適当の方策を立て，渡航者を選定して許せば，既往の失敗を償ふべしと為し，外務省へ禁止解除の申請を為す由なるが，今在伯国公使館員報告に依る耕地より逃亡するとも思はるゝ筋は，大略左（下）記の如し。

先住悪移民の逃亡勧誘，契約期限中他に利益ある耕地又は職業ある時は，直ちに転出す。当初より耕地就働の誠意なく，名を契約移民に藉りて渡航し，上陸後直ちに逃亡す。内地移民と人情風俗を異にし，且つ言語不通の廉あり。耕地主及び通訳者と意思疎通せず，困難を覚えて逃亡す。

以上の欠点は無智文盲者多き為にして，南米の如何なる地なるや，契約事項の如何なるものなるかを知らず，且つ自己の行為が一県及び一国の移民政策に如何なる結果を及ぼすかを知らず，単に目前の少利に迷ひて逃亡を企てゝ転々し，遂ひに何の贏ち得る処なく，茫然として渡航し，遂ひに不良の結果となれる次第にて，其上一体本県移民は伯国と云はず，布哇等に於ても渡航後一団となりて，内地人との間に城壁を構へ，敢えて融和せんとせず。折角海外に活動すると雖，常に四面楚歌声裡に伏在する者多く，他県人に比し，生活費低廉，働力強大加ふるに従順の美点を有し，労働移民として絶好の資格あるに係らず，碌々として一地点に蹋蹐し，少許の利に迷ひつゝあるは，一に言語通せず，有利事業の発明経営が不便なるに因る。而して県当局の方針としては，今回伯国への渡航が再び許される際は，高等小学校卒業程度の者にして，極めて目的の確実なりと認むる者等，十分選定の上許可す可しと云ふ。

1908 年（明治 41）6 月 18 日到着の日本からブラジルへの初回笠戸丸移民中沖縄県出身者が最も多かったことはよく知られているが，これはその渡航より 5 年後の 1913 年（大正 2）10 月の新聞記事である。同記事は在ブラジル（伯国）公使館員報告による本県移民が初回移民の時より，耕地での逃亡移民が多く，その理由をあげ，県移民の欠点を指摘している。日本政府の県移民に対する偏見や差別でもあるが，一方，ハワイなどでも同様な傾向にあったので，ブラジルへの渡航再開に際しては，高等小学校卒業程度の学歴を有し，しっかりとした移住目的をもつ者を選定して送り出してほしいとの要望が述べられている。

④「本県移民送金額」『琉球新報』大正 3 年 3 月 21 日（610 - 611 頁）

大正元年度に於ける本県海外移民の送金額を，国籍別に挙ぐれば左（下）の如し。

国　籍　別	男　（人）	女　（人）	計　（人）	送金額　（円）
米国	二五〇	一二	二六二	三二, 六二二
布哇	六, 三六九	一, 六五八	八, 〇二七	五四〇, 九五九
加奈陀	一二四	六	一三〇	一六, 三九〇
仏領ニューカレドニア	五一五	六	五二一	七, 八六二
墨西哥	二九一	二	二九三	六, 九六〇
秘露	三二五	一〇二	四三〇	四, 四四七
大洋島	八八	〇	八八	一九八
比律賓	一三六	〇	一三六	三, 九八七
伯剌西爾	三一一	一〇八	四一九	二〇, 〇四一
亜爾然丁	二一	〇	二一	二, 三三七
英国	？	？	？	二八二
支那	？	？	？	？
馬来	四	〇	四	〇
国籍不明	？	？	？	四六, 七五七
計	八, 四三四	一, 八九七	一〇, 三三一	六八二, 九四六

右の外帰朝者に委托せるもの六万七千六百二十四円，帰朝者の携帯せるもの八万二千五百八十六円あるを以て，海外在留者の送金総額は実に八十三万三千百五十六円に達する計算なりと。

1912 年（大正元）現在の沖縄県への海外移民の送金額は 68 万 2,946 円で，在留人員は 1 万 331 人である。移民先国（地域）別送金額をみると，首位はハワイの 54 万 959 円で全体の 79.2% を占め，圧倒的に多額の送金であった。2 位はアメリカ合衆国本土（米国）の 3 万 2,622 円，3 位はブラジル（伯剌西爾）の 2 万 41 円，4 位はカナダ（加奈陀）の 1 万 6,390 円であった。このほか，海外移民で帰朝者に委托せるものの金額が 6 万 7,624 円，帰朝者の携帯せるものの金額が 8 万 2,586 円もあり，海外在留者からの送金総額は実に 83 万 3,156 円にも達した，という。また，同統計からは 1912 年時点の男女別の海外在留者数が判明する。男性が 8,434 人，女性が 1,897 人で合計 1 万 331 人であり，男女の比率は男性 81.6%，女性 18.4% で，ほぼ 8 対 2 の割合で男性が多く，出稼ぎ型の移民であったといえよう。

⑤「金口木舌（見せ金問題）」『琉球新報』大正 3 年 3 月 27 日（613 - 614 頁）

本県移民の郷里に対する送金は，近年段々減少して行く傾向がある。之は主として移民が単純な労働階段から脱却して，独立事業を経営する者が多くなり，自然自分の手許に於て運転資本を要するやうになったからだ。此傾向は畢竟本県移民の立脚地が漸次堅実になり，相当に成功しつゝある証拠である。併しながら，父兄の方から云へは，其子弟の為めに当分送金の減少を忍はねはならないから，子弟が海外に於て独立の立場を拵へると共に，父兄の手許は却って苦しくなるのを免れない。

夫処へ持って来て見せ金と云ふ得体の知れぬ債務の履行を迫られては堪ったものではない。京浜銀行の遣口を見ると，国頭のものと島尻のものとを一所にして合併訴訟を起し，被告の連合を避け，欠席裁判にするやうな狡猾な手段を取って居る。彼等の恐れる所は被告の合同運動である。故に努めて其合同の機会を造らせぬようにし，一度合同の機運が起ると忽ち何処かに屏息して仕舞ふが，社会が忘れた頃になると又もや顔を出して来る。京浜銀行の債権が既に商法の時効に依って消滅して居るとすれば，移民側の勝訴に帰す可きは疑ふ迄もないから，関係者はドシドシ其請求を拒絶す可きは勿論，大に合同運動を起して反対訴訟を提起し，彼等を県外に駆逐するが宜い。且つ此問題に就いては，或は刑事問題が伏在して居ないとも限らないから，司法当局の方でも進んで手を入れて見る必要かありはせぬか。

現在も発刊しつづけている『琉球新報』の「金口木舌」と同名のコラムで，100 年近くも前の 1914 年（大正 3）3 月 27 日付けの記事はその内容が見せ金問題である。見せ金とはハワイ渡航に際し，十分に携帯金を所持していることを証明するもので，ほとんどの移民が持参金がなく，銀行などから借りて税関で示していた。その債務は消滅しているにもかかわらず，京浜銀行（戦後東京銀行）が債権として，移民や移民の家族から悪質な業者を介して取り立てていたことで，これが後に裁判沙汰になったことも少なくなかった。善良な県移民の立場と人権を擁護している記事である。

⑥「移民送金額」『琉球新報』大正 3 年 12 月 15 日（645 - 646 頁）

海外本県移民よりの大正二年中送金額左（下）記の如し。

国　別	金　額　（円）
米国	二三, 三九四
布哇	五二三, 〇四〇
墨西哥	三, 三四二
秘露	三, 二八〇
ニューカレドニア	二三, 二〇六
加奈陀	一五, 四五八
比律賓	二, 六九四
亜爾然丁	四, 一四〇
伯剌西爾	三九, 二五四
英国	三八六
支那	一一〇
送金不明	六九, 九八四
帰朝者に委托せる	二四, 一九九
帰朝者携帯金	九八, 七三九
計	八三一, 二三〇

1913 年（大正 2）中の海外移民より沖縄県への送金総額は，帰朝者に委托せる送金額 2 万 4,199 円, 帰朝者携帯金 9 万 8,739 円を含めて, 83 万 1,230 円であった。これを移民先国（地域）別にみると，首位はハワイ（布哇）の 52 万 3,040 円，2 位はブラジル（伯剌西爾）の 3 万 9,254 円，3 位はアメリカ合衆国本土（米国）の 2 万 3,394 円，4 位はニューカレドニア島の 2 万 3,206 円，5 位はカナダ（加奈陀）の 1 万 5,458 円であった。ここでも前年度と同様，ハワイが送金のみの全体（70 万 8,288 円）の 73.8% をも占め，同地域からの送金が圧倒的に多いことが判明した。

⑦「知事（鈴木県知事）演説要項，歓迎会席上に於ける」『琉球新報』大正 5 年 6 月 18 日（『沖縄県史』第 17 巻，749 - 750 頁）

海外の発展：目今の時局に際して，予は海外発展の機到れるを痛切に感す。即ち海外に於ける商権の確保，海外製産物の輸入及び海外移民の奨励之れなり。商権の確保は実に此の機を措いて他になかる可く。海外製産物の輸入また彼我相互に其の有無を通ずる点に於て必要欠ぐ可らず。海外移民の奨励に至りては，亦国力の発展上大に顧慮を要すべき事なり。而して本県に於ける海外関係を見るに，輸出関係としてパナマ帽子の如き百万近くの製産物を有し，海外移民の成績また甚だ良好なるものあり。故に今後は更に一層の努力を以て大に海外発展の実を挙げざる可らず。由来本県民が海外発展の思想に富めることは，既に歴史の証明する処にして，実に西暦一千四百五十年尚泰久王の代に於ける県民は，南洋附近に迄で其の商権を拡張し居たりしなり。然るに其の後慶長役等の災難に逢ひて，中絶の姿となりしは，甚だ遺憾とすべき事なれど，此の血統を継承したる県民たるもの自重益々努力する処あらば，今後必ずしも絶望すべきに非らず。（後略）

第 13 代沖縄県知事鈴木邦義（大正 5 年 5 月 4 日～大正 8 年 4 月 18 日, 2 年 11 か月の在任）の 1916 年（大正 5）6 月 18 日着任早々の歓迎会席上における知事演説の要項の記事である。知事は海外の発展と題して，海外における商権の確保，海外製産物の輸入と並んで，海外移民の奨励を述べている。由来本県民が海外発展の思想に富めることはすでに歴史の証明するところにして，1450 年尚泰久王の代における県民は，南洋付近にまでその商権を拡張していた，という。

⑧「海外移民の送金高」『琉球新報』大正 5 年 11 月 12 日（『沖縄県史』第 19 巻, 699 頁）

大正四年中に於ける海外移民よりの送金高は，総計八十八万三千六十五円八十五銭にして，之を各地に区別すれば左（下）の如し。

国　名	人　員　（人）	金　額　（円．銭）
北米本土	三五五	八〇, 五六一. 一九〇
布哇	八, 七八八	六九九, 三四二. 〇四〇
加奈陀	一五八	九, 二〇八. 六五〇
ニューカレドニア	三八三	一一, 七九五. 六五〇
秘露	六七二	五, 九八三. 〇三〇
伯剌西爾	五八七	一〇, 九九九. 五〇〇
比律賓	四三〇	一四, 九五五. 四〇〇
亜爾然丁	四八	四, 〇六一. 二七〇
蘭領印度	？	六六. 〇〇〇
英	一	四二四. 〇〇〇
香港	一	三二. 六五〇
大洋島	一三	二〇〇. 三〇〇
墨西哥	二三六	四二〇. 〇〇〇
国籍不明		四五, 〇一二. 四一〇

1915 年（大正 4）中の海外移民より沖縄県への送金額は総計 88 万 3,065 円 85 銭であった。これを移民先国（地域）別にみると, 首位はハワイ（布哇）の 69 万 9,342 円 4 銭であり, これは総計の 79.2% をも占める。2 位はアメリカ合衆国本土（北米本土）の 8 万 561 円 19 銭, 3 位はフィリピン（比律賓）の 1 万 955 円 40 銭, 4 位はニューカレドニア島の 1 万 1,795 円 65 銭, 5 位はブラジル（伯剌西爾）の 1 万 999 円 50 銭, 6 位はカナダ（加奈陀）の 9,208 円 65 銭であった。

⑨「南洋と本県移民，自由移民歓迎」『琉球新報』大正 5 年 11 月 26 日（同上巻 700 頁）

近来沖縄県人が南洋に出稼するもの多く，最近に至っては其数三千余人を算する程にて，既に二三の成功者をも出せり。現に比律賓群島中の南方に当るミンタナオ島には大田恭四（三か）郎氏の経営せる大田興業会社と云ふ麻の輸出をなす会社の副社長を勉めつゝある宮城某（大城孝蔵か）と云ふ本県人もあるが，其の多くは台湾を経て英領香港に渡り，それから北ボロネオの山打根（サンダカン）に渡り，仝地で手続を得てホロ島へ上陸するを常として居るが，当地は自由移民に非ざれば上陸を許さゞる為め，官憲に発見されて送還されるもの往々あり。去月上旬の事，マニラ港発の定期船に自由移民にあらざる沖縄県人二十二名と，一名の和歌山県人とが乗り居る旨，マニラ税関よりホロ税関に通知が来て，前記二十三名は十月十四日に遂に上陸不可能なりとて，其儘帰国を命ぜられしが，皆憤慨し，一日間の仮上陸の許可を得て，正式裁判を仰がんと目下手続中である。若し県人にして渡航希望者があるならば，予め其手続を踏み，尚ほ此の裁判事件の落着する迄は渡航を見合せた方が，将来の為め得策と思はれるのである。（北ボロネオにて富士屋生）

沖縄県人が南洋に出稼ぎするものが多く，最近ではその数 3,000 人余にも達している，という。なかでも，２，３の成功者中フィリピン・ミンダナオ島の太田興業株式会社の副社長を勤めた大城孝蔵（記事では宮城某）をあげている。また，台湾・英領香港経由インドネシアの北ボルネオ島サンダカンへ渡り，ホロ島へは自由移民としてなら上陸が許されるが，密航なら駄目で沖縄県人 22 人が裁判事件になっている，という。

⑩「県農卒業生現状（上）」『琉球新報』大正 5 年 12 月 10 日（『沖縄県史』第 18 巻，897 - 898 頁）

最近の調査にかゝる県農卒業生の現状は，官公吏自宅農業者各七十九名，学校教員三十名，軍人三十名，高等専門学校卒業者七名を出して，各自其の道に躍進しつゝあれども，更に愉絶壮絶快哉を高唱せざるを得ざるは，実に海外雄飛者五十四名を算したる事にして，南米に北米に南洋に発展し，所謂世界的発展をなしつゝあることなり。而して本校は前述の如く三百二十九名の卒業生を出し，夫々社会の需要に応じ居たれども，本校校舎が現地に移転せしより一層卒業生需要の機運を催進せしめ，目下卒業生は悉く契約済みの有様にて，社会が農学校卒業生需要の傾向を示し来りたること斯く著しく，而かも各方面より採用の通知に接すれども，遺憾ながら，需要数は遙かに卒業生数を超過し，県立農学校長事務取扱宮城鉄夫氏は，之れ等に関する応接に煩悶忙殺せられつゝあるの有様なり。（中略）

第一回卒業生は其の時期の早くして，而も古かりし程に勢力あり。且つ重要なる地位を占めつゝあり。即ち海外渡航者たる宮城新昌，稲福善太郎の二氏は其の代表的人物にして，殊に本校卒業して外国渡航者中の巨擘といふべきか。二人共に北米英領カナダ国バンクーバー市にローヤルフイツシユカンパニーの創立員幹部として，勢力縦横に多数の白人を使役し，鑵詰製造業式牡蠣養殖業に従事し，特に同会社の名を以て，日本政府に交渉し，神奈川県金沢湾内に牡蠣の養殖所を大々的設計にて設備し，此処より毎年収得せる牡蠣を米国に輸出し，多大の利を博しつあるが如きは，誠に卒業生の模範といふべきか。尚ほ二氏はバンクーバー市及華府（ワシントン）に同本店を開業し，華府なるローヤルフイツシユカンパニー支店は稲福氏これを経営し，宮城氏はバンクーバー本会社の主任にして，且つ日本金沢湾内に於ける牡蠣養殖所の経営者たり。尚ほ仲間松二氏は米領比島マニラ市郊外に於て，実地に土人を使役し，大農場を耕作しつゝあり。其他国頭郡農業技手平良源八氏，羽地村収入役宮城利三郎氏，税務属仲宗根源栄氏，沖縄県林業技手久場川牛太郎氏，同農業技手金城親元氏等は，何れも其の官衙に重要視さる。久しく本県農事試験場糖業試験場に在勤せし平良徳助氏の著述にかゝる「糖業の研究」てふ著書は，近日中に出版せらるべく，其の暁は沖縄糖業界に大刺戟を与ふることとならむ。

1916 年（大正 5）時点での沖縄県立農学校の卒業生で 54 人もの海外雄飛者がいて，南米・北米・南洋など世界的に発展，活躍している，という。また，同校の第 1 回卒業生で海外渡航者のカキ養殖で有名な宮城新昌・稲福善太郎がカナダのバンクーバー市で活躍している現状を伝えている。

⑪「県農卒業生現状（中）」『琉球新報』大正 5 年 12 月 11 日（同上巻 899 頁）

第二回にありては卒業生総数四十三名中十七名の外国渡航者，八名の官公吏，二名の軍人，四名の自宅農業者，六名の学校教員，一名の会社員に分たる。斯回の特徴は実に外国渡航者の多きを以て欣誇となすべし。就中宮里貞寛氏は米領布哇国ホノルヽ市なる本邦人経営にかゝる米屋旅館の支配人となり，年々本国より渡航し来る本県民の優遇につとめ，台湾打狗（高雄）鈴木合名会社員たる仲本吉三郎氏の事務的才能の力は，現今の地位を誘引し，将に成功に近からんとす。

第三回は総員十九名中，外国渡航者の八名，教員の五名，官公吏の八名，自宅農業者の三名，会社員の一名に分類せられ，鹿児島農事試験場技手浜島春香氏，沖縄県技手宮城信次郎氏，森林主事新垣三郎氏，大宜味小学校訓導山城秀雄氏等は亦未来ある青年なり。第四回卒業生十九名中海外三人，兵役二名，自宅農業四名，官公吏六名，教員一名の割合。就中英領シンガポールジョホール藤田組ゴム園在勤中なる照屋全昌氏は第一回卒業生にして，在米の宮城新昌，稲福善太郎二氏と共に在外者中錚々たる人也。照屋氏は鹿児島高等農林学校卒業後直ちに新嘉坡に赴き，雇として入社せるが，其成績良好なりとて，益々園長の信任する所となり，現今は同園主任の地位に昇り，其技術卓越敏捷なりとて，遠近の好評嘖々たり。氏は高等農林学校在学中竹栽培の論文を作成し，爾後此の地に渡りたる後も，尚ほゴム園主任勤務の傍ら其の研究を続行し，併せて熱帯植物に其造詣を深からしむと云ふ。其他台湾帝国製糖株式会社在勤にして，而も甘蔗栽培農場の経営に長ぜる金城信直氏あり。而して神奈川県小田原町益田園芸場在勤の宮城源次郎氏は技術優秀にして，且つ園芸上熱心家なれば，益田孝氏の信任愈々深しと。此期に於ける岸本淳亮氏，比嘉吉□氏は率先して南米へ渡航せり。実に二氏が南米渡航の序幕を開きしより漸次此地に渡るもの増加し，現今南米渡航在住者は農校卒業生のみにても二十有三名に達せり。第五回総員三十三名中外国渡航者二名，官公吏十三名，自宅農業者六名，学校教員五名，実業会社在勤三名，薬剤師一名の割合。此の期の卒業生程異分子の集合せること他に其の比を見ず。即ち仲村渠信義氏は盛岡高等農林学校獣医科を卒業し，母校教諭として育英事業に，新里利恒氏は鹿児島高等農林学校農学科を卒業し，本県農事試験場技手として，現に其職にあり。青島林務署在勤の陸軍技手宮城桃幸氏は，曩に静岡興津農事試験場に於て，園芸を実地に学習したるもの。

目下山東の地に園芸主任として其の技の演習しつゝあり。台湾茶樹試験場在勤中なる中程源次郎氏は，製茶の方法を講究し，其の技大いに熟達し，格別進歩の名高く，渡久地政勝，宮城盛太郎の二氏の如き警察官となり。久志助程氏の如き薬剤師試験に及第し，目下那覇に実地開業せるも亦面白く，農業と薬剤との関係上興味ある事と云ふべし。

県立農学校の第 2 回卒業生 43 人で，うち 17 人が外国渡航者で海外移民とみなされ，全体の 39.5% をも占める。そのなかでハワイ移民の宮里貞寛がホノルル市の米屋旅館の支配人となっている。第 3 回卒業生は 19 人中 8 人，第 4 回卒業生は 19 人中 3 人が海外移民である。この 4 回卒業生のなかで照屋全昌が，英領シンガポール・ジョホールで藤田組ゴム園主任の地位にある。また，同期の岸本淳亮と比嘉吉□は率先して南米へ渡航し，その端緒を開いたと，いう。その結果，現在南米渡航在住者は県農卒業生のみでも 23 人に達している。第 5 回卒業生は 33 人中海外移民は 2 人であった。

⑫「本県と伯国移民, 第一期移民二百余名」『琉球新報』大正 6 年 2 月 9 日（『沖縄県史』第 19 巻，705 頁）

来三月より輸送開始せらるべき伯国行移民の大募集に当り，独り本県のみ除外せられんとしたる事情ありし由は既報の通りなるが，一昨日東京伯国移民組合より，当地東洋移民出張所栩野安松氏の許に達したる電文には「外務当局の意見に依り沖縄県下募集を中止する筈なりしも，貴下等の懇請あり，県当局も今後移民に対し充分訓戒方尽力ある旨を以て，外務省に於ては一両日中電報にて，沖縄県に問合せたる上，決定する事となりたり」とあり。去れば，本県下募集の事は最早や決定せりと見て差支へ無かるべく，茲数日中に募集開始の発表を見るべし。而して本県下の募集員数は，東洋の栩野，南米の丸山，森岡の川口三代理人の手に，各二十家族（八十人）宛取絡められ，総数二百四十名を第一期移民として渡航せしむる事に内定し居れりと。

外務省の移民統計によると，沖縄県からブラジルへの移民は，1908 年（明治 41）の 355 人から開始し，以後 3 年間の中断があり，第 2 回は 1912 年（明治 45・大正 1）の 421 人であった。その後 4 年間は制限され，1917 年（大正 6）に 2,138 人，1918 年（大正 7）に 2,204 人の大量の送り出しをみる。上記の県移民に対する外務省の募集の中止や制限の理由は，ブラジルの契約耕地での逃亡移民が多く，日本人移民として品位に欠けているとのことであった。同記事によると，1917 年 3 月以降のブラジル移民大募集に呼応して，沖縄県でも同国行き移民を募集することとなり，東京伯国移民組合より東洋移民会社出張

所あてに電報で知らせ，県下の募集員数を東洋・南米・森岡移民会社取り扱いに各 20 家族・80 人あて，総数 240 人を再開第 1 期移民として渡航させることに内定した，ということである。県にとっては朗報であった。

⑬「学校から社会へ（一），卒業生の売口，（那覇）商業学校」『琉球新報』大正 7 年 2 月 22 日（『沖縄県史』第 18 巻，978-979 頁）

学校から社会へ … 多くの学生が四五年間金釦の楽しい平和な学校生活から，社会と云ふ荒浪の中に泳ぎ出す。其の勇ましい門出とも云ふべき卒業期に際して，各中等学校を廻って卒業生の捌け口を調べて見る事にした（一記者）。

商業学校：今年も相変らず好く売れる。先づイの一番に，本県唯一の実業学校たる那覇商業学校を調べて見るに，「三学期の試験が終らない今日二十五名の三年生が皆卒業すると云ふ事は決って居ないが，方々の会社銀行からの申込数が卒業生の数以上にあるので，就職口は全部決って居るとは樺山校長の話。その分配は県外では南満鉄道の六名を筆頭に，三菱合資会社本店，台湾銀行各二名，台湾倉庫会社，朝鮮銀行，八重山炭坑基隆支店の各一名，坂神地方就職三名で，県内は自家営業三名，就職（会社商店）二名，高等の学校に行くのが東京高等商業，明治大学商科各一名で，それから外国に雄飛するのが布哇一名，南洋一名と云ふ状態になって居る。本年の卒業生の売れ口が是迄の夫れと異なる点は，県外行きが多くなって県内就職が尠くなったのと，海外雄飛者が殖えたのと，それから内地の大きな諸会社から申込があった事である。これは是迄の卒業生が可成成績を挙げた結果，社会でも認めるやうになったのにも依るだろうが，多くは名校長の称ある樺山氏が八万（方か）尽力した賜ものに外ならないと思ふ。月給は最初県内で十五円内外，県外が二十円以上二十五円以内ださうだが，条件附けで申込んで来た処では猶ほ割の好い処もあると云ふ。本年の其部では，台湾倉庫で月給十五円に在勤手当月給の四割，臨時手当仝一割，舎宅料六円で月収三十一円五十銭に，年二期の賞与金は二ヶ月乃至五ヶ月分の月給を給し，出発の仕度費も実費を支給する事になって居る。（後略）

1918 年（大正 7）2 月下旬から 3 月上旬にかけて，沖縄県内の上級学校の卒業生の就職先（売口）について，一記者名で 10 回にわたり連載している。その第 1 回目に実業学校で就職率のよい那覇商業学校を取り上げ，樺山校長の尽力で全員が就職が決っていて，月給の明細までのせてある。本年の卒業生の売れ口は，これまでのそれとは異なって，県外行きが多く，県内就職が少なく，海外雄飛がふえたのと，内地の大会社から申込みがあったとのことである。海外移民はハワイ（布哇）へ 1 人，南洋へ 1 人みられた。

⑭「学校から社会へ（七），卒業生の売口，水産学校，海外渡航熱が嵩り，大谷光瑞師の下に行くのもある」『琉球新報』大正 7 年 3 月 2 日（同上巻 983-984 頁）

県立水産学校卒業式は例年の通り来る二十七日挙行の筈にて，卒業生は製造科八名，漁撈科二名の予定なるが，卒業生の売れ口を聞くべく昨日同校に亀井校長を訪へば，不在なりとて，竹内教頭更って語る。「他県の水産学校では意気旺んな青年になると，海に自由に飛び込まれるのを楽しみに，進んで漁撈科に這入る傾向があるので，従って漁撈科の生徒が多数を占めてゐるが，本県は怎ふしたものか，漁撈科よりは製造科が多いと云ふ。他県とは全で反対の現象を示し，本年の卒業生も製造科八名に漁撈科二名と云ふ有様であるので，学校でも折角漁撈科の入学を勧誘して居ますが，怎麼も思ふ通りに往きませんので困ってゐる次第です。卒業後の行く先は，生徒の希望をまだよく聞いて見ないから，確の事は云へませんが，三四名は南洋，比律賓辺に渡航を希望してゐるやうに聞きました。残りは県の水産実習教師か若は株式，個人経営の会社に就職して，斯業に従事する事と思はれます。俸給は官庁に奉職する者が十二円，水産会社に就職する者が賄付で十四五円が通りであるが，本人の腕次第に漸次増給しますから，先づ割の好い方です」云々。尚ほ氏の語る処に依ると，本校卒業生中海外渡航せる者四名あるが，其中一名は卒業後他県に渡り，二等運転士の免状を貰ひ，更に米国に渡航し，仝地に於て艦長の免状を贏ち得，現に或る酒積船の船長を勤め居り。他の一名は渡米後，コロンビヤの或る鑵詰会社に入り，今日では相当の地位を占め居れりと。海外渡航と云へば，本年の卒業生にて南洋へ渡航すべき者の中一名は，過日来県したる大谷尊由師の令兄にして，目下南洋ボルネオの東方セレヘス島（和蘭領）のス（メか）ナードに於て，開拓に従事せる本派本願寺前法主大谷光瑞師の下に赴く事に決定し，卒業式終了の後四月上旬頃，仝島へ向け出発する由なるが，仝島は光瑞師予てより理想の通り，南洋の一角に純粋なる新日本街建設を実現すべく，台湾より人夫一千名を移住させ，和蘭領事の仲介に依り，土民より借り受けたる森林を倒伐開拓し，理想の農村を作らんとするに在りて，人夫中には料理人，鍛冶屋，炭焼，漁夫，日常器具の製造人等，一村落に必要なる全部を網羅する予定なれば，右の卒業生も渡航の上は漁撈か，若くは船員の職に就くものならんと。

1918 年（大正 7）時点で, 県立水産学校の卒業式は 3 月 27 日の予定であり, 製造科 8 人, 漁撈科 2 人が卒業するが，その就職先は 3，4 人が南洋，フィリピン（比律賓）あたりに渡航を希望している，という。本校卒業生中海外渡航者は 4 人いて，うち 1 人は渡米後コロンビヤ（カナダか）に渡り，缶詰会社に就職して相当の地位を占めている。本年の卒業生で南洋へ渡航予定の 1 人は，大谷尊由師令兄の本派本願寺前法主大谷光瑞師が開拓予定のオランダ領インドネシア・セレベス島メナードへ 4 月上旬に向かう，とのことである。

Ⅴ．おわりに

以上，「新聞記事にみる大正期沖縄県における移民事象」と題して，大正期沖縄県の新聞記事収集の研究史，大正期沖縄県移民の新聞記事収集と見出しの分析，収集新聞記事の14の事例を記述してきた。県内の新聞は太平洋戦争の影響もあり，大正期の新聞の残存数が非常に少ないといわれてきた。それでも，最近県公文書館内の史料編集室の精力的な調査・収集により，大正期の新聞もそろいつつある。

本稿では公開された現存する新聞資料をもとに，沖縄県における大正期の移民事象に関する記事を収集し，その見出しを分析した。また，収集新聞記事の事例は大正期前半の1918年（大正7）までにとどまったが，重要と思われる移民記事を採録した。今後，移民研究の基礎的資料として，このような新聞資料が昭和期の事例と併せて，通史として点から線，線から面へともっていければと考えている。

注

1）拙稿（2012）「新聞記事にみる明治期沖縄県における移民事象」『南島文化』第34号，pp.169-187，沖縄国際大学南島文化研究所。

2）前掲注1）のp.173の表1　沖縄県における県・市町村史誌の「新聞集成」等刊行一覧（2011年現在）を参照してほしい。

（いしかわ　とものり・琉球大学名誉教授・人文地理学）